# 台灣霧社的沖繩人巡查與原住民現地妻

台湾霧社の沖縄人巡査と原住民の「現地妻」

The Police Officers from Okinawa in Mushya (Wushe), Taiwan and Their Aboriginal "Genchi-Zuma", Local Wives

文 | 又吉盛清（沖縄大學客座教授）
漢語翻譯 | 廖彦琦

日本の台湾植民地下では、多くの沖縄人巡査、教員、土木人夫らが原住民の山地に送り込まれていた。日本国家に統合されて以来、日本社会の底辺に位置付けられてきた沖縄人に対する、差別構造的な偏見は変わることはなかった。

台湾総督府警察の幹部の人事発令で沖縄人巡査は、抗日や反抗の強い地域や山地の危険区の「討伐隊」や最前線に投入されて犠牲者を出している。霧社や周辺の埔里などに早くから沖縄人巡査、公学校の教員が入っていたのはその為である。

## 沖縄人巡査

霧社の山地で起こった様々な史実は、霧社事件をはじめ多面的に語られてきたが、まだ取り残されているのも多いのである。ここでは沖縄人巡査が敗戦になって、霧社を引き揚げるときに、原住民の女性の救助で逃避行した事例の一つを紹介したい。

その沖縄人巡査の生まれた村は、沖縄本島北部に位置し、前面は太平洋の海原、背面には山々が縦走する山村である。主たる産業もなく人々の暮らしは貧し

日本的殖民地台灣，很多的沖繩人巡查、教員、土木工人被送進原住民的山地。被併入日本國家以來，對於一直處於日本社會底層的沖繩人，結構性的歧視偏見未曾改變過。

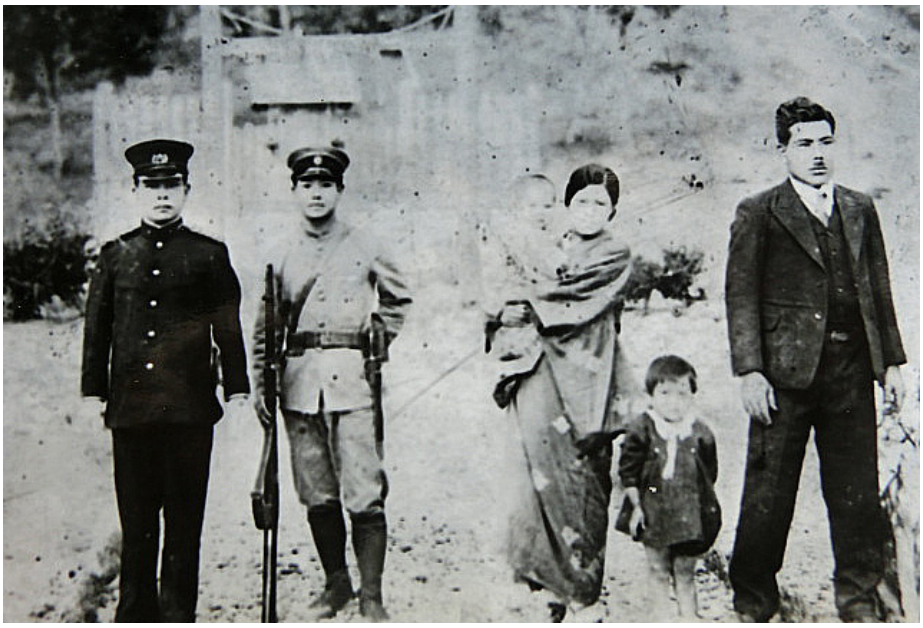
因台灣總督府警察幹部的人事派令，沖繩人巡查投入抗日與反抗強的地區、山地危險區的「討伐隊」等最前線的地方而不斷有犧牲者。很早就進入到霧社與周邊埔里等地的沖繩人巡查、公學校的教員正是此原因出現在這兒。

## 來自沖繩的巡查

原發生在霧社山地的各種史實，以霧社事件為首雖曾多方面地討論，但尚留下諸多未曾被談起的事例。在此想介紹沖繩人巡查在戰敗後，撤退霧社之際，因獲得原住民女性的救助而得以逃命藏身的一則事例。



政大原住民族研究中心



在霧社執行勤務的沖繩人巡查家族。本文的沖繩人巡查所指為他人。照片中的巡查已成家，妻為沖繩人（大正12年，1923年間）。

く、貧困から抜け出す唯一の道は、他に職を求めることであった。

渡台して霧社に赴任すると、他の任地でもそうしたように原住民の女性を「現地妻」（正式な婚姻ではなく、勤務先で都合よく身の回りの世話をさせたり、性的対象にした遊び女のこと）にした。それが山地に勤務する日本人巡査の特権だと思い込んでいたのである。

## 異なる日本人嫁

「現地妻」は、他の山地に転任になれば、どうせ捨てていく女だと、荷物でも扱うかのように対処した。しかしこのような状況が逆転し崩れたのは、日本帝国の敗戦であった。植民地下で横暴に振る舞った巡査が、積年の怨念を晴らす非難、攻撃の的になったのである。各地でも、同じく巡査、警防団、自治会のリーダーなどがその対象になった。

沖縄人巡査はこのような中で一日も早く逃げ出すには、地元の山地をよく知る「現地妻」を引き連れなければならないと思い懇願した。こうして原生林の林

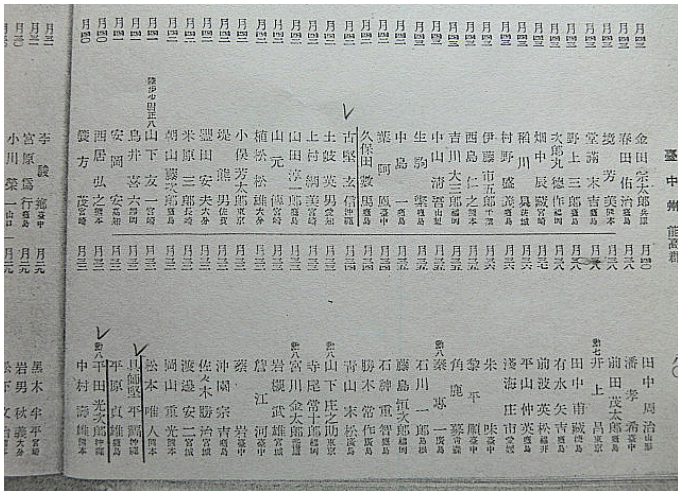
那位沖繩人巡查所出生的村落，位於沖繩本島北部，是前面有太平洋大海，後面有群山縱走的山村，甚至沒有主要產業，人們的生活很貧窮，要從貧困中擺脫的唯一出路，即是在外謀求工作。

渡台後到霧社赴任，跟在其它任職地一樣，把原住民女性當作「現地妻」（此指不具正式婚姻的女性，在工作地點方便照料日常生活，並做為性對象的妓女）。我們確信那是在山地工作的日本人巡查的特權。

## 與眾不同的日本太太

日本人巡查認為當自己調職到其它山地時，「現地妻」畢竟是要拋棄的女性，因而就像處理行李般地對待她們。但是，這種情況卻在日本帝國戰敗時，逆轉變調。在殖民地下蠻橫行動的巡查變成了排解多年怨恨的責難、攻擊的標靶。在各地

政大原住民族研究中心



找得到在霧社與周邊地區公學校任教的3位沖繩人教員的名字，同時記錄校長名字的《台灣總督府及所屬官署職員錄》（昭和4年，1929年）。

日本時代的霧社屬能高郡管轄。此為找得到3位沖繩人巡查姓名的《警察職員錄》（昭和8年，1933年）。

立する山地を超え、濁流の河川を渡って逃避行を続けて、平地に下り生き延びて帰沖したのである。

帰郷した沖縄人巡査は、生死を共にした「現地妻」に感謝して婚姻を済ませ、正妻として迎えたのである。集落でも二人の帰郷を歓迎し祝福した。村人は、妻の皮膚は沖縄人と同じように褐色であったが、琉球語ではなく日本語を話したので、ナイチャー（日本人）嫁と見たのである。

## 幸福あるいは不幸？

こうして二人の間には、家族が出来て孫も誕生したが、台湾体験と逃避行のことは、隠されたままであった。子供も孫も父と祖父の命を救った母と祖母の物語は、長いこと知らされることはなかったのである。

この事例は一つの美談だという見方もあるが、私には原住民の一人の女性の生き方を大きく、狂わせたようにも思えるのである。本来であれば父母の住む山地で、好きな男と出会い子供を育て夢と希望を持って、生きることがもっと自然で、幸せなことだと考えて

的巡查、警防團、自治會的領袖等都同樣地變成了這樣的對象。

沖繩人巡查在此情況當中，為了盡快逃出，產生非得帶著熟知在地山地的「現地妻」不可的懇切想法。就這樣越過原生林林立的山地，渡過濁流的河川，繼續逃命藏身，下到平地，保全性命，回到沖繩。

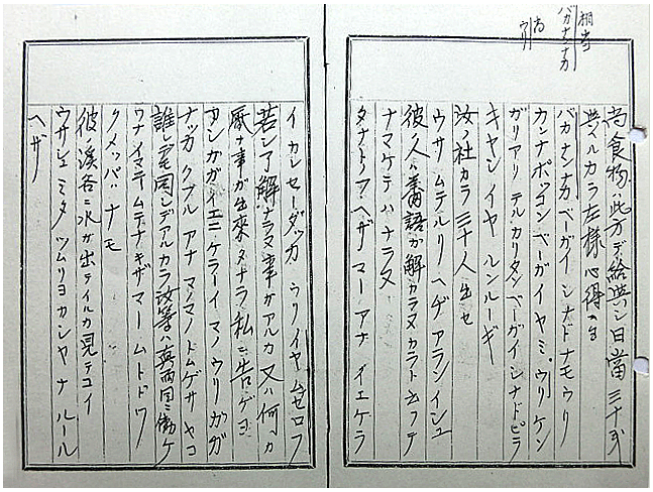
已經回國的沖繩人巡查，感謝生死與共的「現地妻」，所以締結婚姻，迎娶其為正室。在村落也歡迎兩人回到故鄉，並給予祝福。從村民看來，巡查妻子的膚色雖然與沖繩人同樣是褐色，但因為說的話不是琉球語，而是日本語，所以都認為她是日本太太。

## 幸或不幸？

此後，在兩人之間，即便建立了家



政大原住民族研究中心



霧社的沖繩人巡查攜帶的「蕃語及舊慣學術講習手帳」，包含原住民分配勞役的日本語與原住民的話（大正12年，1923年版）。

又吉老師在1980年代初進入霧社事件現場，接受原住民的證言，確認沖繩人以及原住民有關的實際情況，並考察關於沖繩人的戰爭和殖民地責任。證言與嚮導者是經歷過霧社事件的林光明先生（日本名：下山一，前列左）。

るからである。ある意味では、植民地下の二人の出会いは不幸ともいえるもので、二度とこのようなことが、あってはならないようにと戒めたいのである。

注釈：「現地妻」琉球王国で先島に赴任した役人が、勤務先で囲った女性のこと。勤務が終了するとそのまま捨てられたように島に残された。権力者の横暴な実態と民衆の悲しみを表す語彙である。

## 又吉盛清

1941年生於沖繩。曾任浦添市立圖書館長、浦添市美術館長、沖繩大學教授。現任沖繩大學客座教授。專攻沖繩、台灣、東亞區域研究。著作有《日本殖民下的台灣與沖繩》、《台灣今昔之旅》、《日露戰争百年－沖縄人と中国の戦場》、《靖国神社と歴史教育》。最近，因「台灣出兵」（牡丹社事件）140年企畫，進行沖繩、台灣、日本等東亞相關史蹟的田野調查學習。


族，孫子也出生了，但有關台灣體驗與逃命藏身的事情，卻始終隱瞞不語。小孩與孫子對於父親（祖父）與救了父親（祖父）性命的母親（祖母）事跡，長久以來都未能得知。

此一事例雖然也能看做是一樁美談，但我認為這卻使一名原住民女性的生活方式發生劇烈變動。因為我認為本來她能夠在父母居住的山地，遇見喜歡的男人，養育孩子，懷著夢與希望活著，是再自然且幸福不過的事情。在某種意義上，在殖民地時兩人的相遇，也能說是不幸的事，希望能夠引以為戒，不要再發生像這樣的事情了。◆

註釋：「現地妻」是指在琉球王國赴任先島的官員，於勤務所在地納為側室的女性。勤務結束後，她們便照舊被拋棄並留在島上。此一語彙表現出權力者的蠻橫實態與民衆的悲哀。

政大原住民族研究中心